「イーゼンハイム祭壇画」《天使の合奏》主題解釈に関する一考察

早稲田大学 茅根 紀子
CHINONE Noriko

16 世紀初頭のこと、現フランス領イーゼンハイム村の聖アントニウス修道院では、信者の増大に伴って修道院の増改築をせまられていた。時の修道院長グェルシは、新たな附属礼拝堂に相応しいものをと当時高名であったゴットハルト（通称グリューネヴァルト）に祭壇画制作を依頼した。これが「イーゼンハイム祭壇画」の由来である。本作品は図像の難しさ故に数多くの解釈を生んできたが、決定打の無いままに昨今では作品研究そのものが先細りの観がある。解釈の焦点は第 2 面中央パネルの《天使の合奏》の主題解釈にある。これが解決されない限り第 2 面の図像プログラムの意図は明らかにされず、祭壇画全体を解釈することも難しい。本発表では、解釈の要である《天使の合奏》の主題を考察する。

《天使の合奏》には様々な解釈があるが、特にとりあげるべきは次の 3 つである。まず一つ目にレオー、ベルンハルト、フェッター等に代表される最も一般的な見解であり、「キリストの降誕を待ち望むマリア」図像と解釈するものである。一方シェヤは右回転翼の《キリストの復活》との関連から「聖母マリアの戴冠」と解釈した。アンツェレフスキーはフランスの「受胎告知」図像との類似から、マリアが受胎する幻を描いたものと解釈した。しかしそれぞれに難があり、他の解釈を完全に退けるには至っていない。

発表者はこれらに対し、左回転翼の《受胎告知》と《天使の合奏》との間に見られる画面構成並びにモティーフの類似を新たに指摘する。このことより《天使の合奏》とは、本来「告知」と「受肉」が同時に表される「受胎告知」図像から「受肉」が分離した非常に特殊な作例であるとの仮説を提示したい。類例が無く解釈の定まらない黄金の建築物については、マリアを懐妊させた神のロゴスがマリアのいる空間にも作用しゴシック聖堂が変容したものと考える。次に図像学的アプローチによって傍証を試みる。《天使の合奏》が「受胎告知」に表されてきた「受肉」を表象するならば、「受胎告知」図像との共通点を《天使の合奏》に認めることができるはずである。《天使の合奏》は非常に特殊な作例だが、実は「受胎告知」の伝統的なモティーフを借用し、組み合わせながら使用している。ここでは、本来「受胎告知」に表されるべきモティーフが《天使の合奏》から右隣の《庭園の聖母》に様々な形で忍び込み、関係しているのである。《天使の合奏》と《庭園の聖母》の密接な関係性は、「庭園の聖母」と「受胎告知」が親和性の高い主題であり、度々両者は融合したり並列することからも自然と言えよう。

本発表は今後の研究に向けての出発点となるものである。多くの疑問点を解明するには、病院施設を核として発展を遂げた聖アントニウス修道会の実態を包括的に考察する必要がある。